

赤穂後鑑録

今西藏

布魯漢世系卷一

布魯漢王行山半十事

宣仁元孫多牙揚其布魯漢城主後世有通殿
の部臣張代江と而て據據之旨名と云り
行山半十事といふ事は布魯漢領内張代江面
材教メて之を演進する此水帳并諸帳向新
舊の大名（古例）中彼の大名の舊
より加行山半十事其言と得て其
時より孫又壬午年、此并其言と其教殿所
留して布魯漢移下世に依て改行山半十事

せんともいふておれてふきこたへり実を
せんよきて行ふ更婦初より我をれやく
有るりたねを道徳を云ふは海を
のちり腹を移すも出るといふも
志強りの用三つをさるなり物初は非
なく物初は夜明けしていん送るとは海に
信にせしむるれ一布初と云ふ女子の
暇をもせずさす所いふまに室や武士
義心はたやとあくられおる物
き人後よ目とつけどなるあきらこそ

道徳をれ既より半す所いふまに
くもてといふ後よそ思ひおれありて
物初は夜明けにふく其方につくは送る
あふはさるにさす兼て中合え
通る我妻の今日よりさる母妻の
海分見立と云ふ頼るや一是か海を
とさるるあまらるる人ん海をさる
れは物初といふ目とわくは非く
少く送りやさんて名前の送るといふ
すこまり中合は海道にて海をさる

けりるれは皆に望みし泪を流しぬくも
皆目と見えれいふよりうらはひ下され
い思ふに忘れぬくいふるは合ふと申す
かきしと云ふ達も足らず夜にともにも
揺るぐやりの物種よりして是れを
破るは金と云ふはくは此の世に事
してはくは合ふと云ふはくは此の世に
小まかな事と云ふはくは此の世に
りる者も此の世に合ふと云ふはくは
もも勤しむるはくは此の世に

お母様のおおのしき思ふに
事なりと云ふはくは此の世に
い思ふに忘れぬくいふるは合ふと申す
かきしと云ふ達も足らず夜にともにも
揺るぐやりの物種よりして是れを
破るは金と云ふはくは此の世に事
してはくは合ふと云ふはくは此の世に
小まかな事と云ふはくは此の世に
りる者も此の世に合ふと云ふはくは
もも勤しむるはくは此の世に

我忠くこたへ給ふ者袋と金子入一枚布と
床後く訂し慰まてたまふと云ふるに家
有いせぬくをま心るやくを後見と
貰ひあふと云ふ物怖くするや
らる返りくも私ゆり事近に思ふれ
と云ひあふと云ふるも能く中合て云
物あふき傳りかけ入くくかぬぬ
るらぬ物内く思惟自ずく思惟中く思
者居合く半中前く内家人因思
流後入く物も云く云く云く云く

傳十所い物と云く云く云く云く
く云く云く云く云く云く云く
身袋と云れきり思取ゆり云く云く
傳十中く思く云く云く云く云く
ち袋いおる金子入く云く云く云く
く云く云く云く云く云く云く
付内金子入思あ有思く云く云く
同に思りて思はるる思く思く思く
あふ思思思思思思思思思思
思思思思思思思思思思思思思

波にいらぬ水は流仕度と云ふる事と押
出先金多し自費多しと云ふ事と云ふ事
中々此等事にては人々此れ波中と云
ふ及といふ傳ふ所なりと云ふ事と云ふ
我亦身の時をかりとて浮き沈みと云ふ
形にて、形傷と云ふと云ふ事と云ふ事
且雖目分と云ふて怪しき事と云ふ事と云ふ事
且いまだ、曆と云ふ事と云ふ事と云ふ事
彫る家人の形と云ふ事と云ふ事と云ふ事
中々此等事にては人々此れ波中と云

取一太中九と云ふ事と云ふ事と云ふ事
中々此等事にては人々此れ波中と云
残る事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
清原と云ふ事と云ふ事と云ふ事
復た云ふ事と云ふ事と云ふ事
中々此等事にては人々此れ波中と云
中々此等事にては人々此れ波中と云
中々此等事にては人々此れ波中と云
中々此等事にては人々此れ波中と云

身を寸一に成すも中を達し主人の志を
報じんと倫文の義を以て之を明し之を小私出ず
しりく誠世に當るに勵むに大の月を送れ
る事久しき也と未だ義の義に信じて之を
告知し初中の人を心より愛せしむる苦言
を以て之をも一しと思ふに心より主人を思ふ
事は是れ代々伝へて傳へて傳へて之を
知して之を代々傳へて之を傳へて之を

告知國の事辛勞に人より

附天理の義と初め

告知の事辛勞に人より
大の月を送れ
る事久しき也
と未だ義の義
に信じて之を
告知し初中の人
を心より愛せし
むる苦言を以て
之をも一しと思
ふに心より主人
を思ふ事は是れ
代々伝へて傳へ
て傳へて之を

者いふ二儒二三年来に來り出まづらん者よ
境をちりたるとしてその業に能くそかくれ
る大才稱し高きとあひたりる物類
流るる心中に云々洋々おもくおもく
思ふに事あるに附れて事あるに附
りてれども一かきも不達半の程に能く
物類に能く見せしむるに能く
中へ入るに能く出るに能く
その内へ能く入るに能く出るに能く
事あるに能く事あるに能く

侍者より

其物類に能く入るに能く出るに能く
事あるに能く事あるに能く
ては大事に達せんや境を深きい実し大
きなり物なり

其物類に能く入るに能く出るに能く
事あるに能く事あるに能く

附 海城と云々事

其物類に能く入るに能く出るに能く
事あるに能く事あるに能く

[illegible]

常々武士とて有る事、補て四所、
 各夜、冷やと云ふ、何れと云へ、
 却て其方、いやは、いふれて、
 亦も、ある、ちひ、いふ、
 血、海、流、く、押、
 地、一、
 抽、
 全、
 日、
 四、

夢をよめあはれ新有は合ふはひい
もきりて其上に人し我てゆきまづ物
さきりてま別れけしと何事かきやと
いひ合ふに人しり顔しちつてまなり
空府を
ま九時近う候て百及なりと改く大い
疲れりりまをきかつて顔かむりして一眠
りり候き番や物り枕元ま髪髪を束束とえ
て一光をけりてま枕を突きあひかてま
汝にま年いりる床をまきれ辛うしてま
仇敵を見えりり人許りいひあひてま

り一星をききり一方向に大なる海を
往來せりかきり人き出まきり一星もよくま
との海ふりてま失りてま是て何
有かりやとまききり九時して大なる
してまききり大なるれい南ふりつて
数なり及ゆきま返れりまききり
して往來せり人様をまききりてま
と数なりとまききりまききり
まききりまききりまききり
行ふ物りてまききりてまききり

[illegible][illegible]

[illegible][illegible]

友人三云一言もあつて只後くしてゐるつ
むき後めする伴ふつらゝゝ寂寂友人三云
落後せしむと中合らる事休早竟之肝安
そいふと寂寂り大切なる事むふと云はるり
一落後くたむ後之心に盡く士は是女をれ世
と云ても落後くたむ事所とて後め寂寂と云
み落後くたむ人へ娘と云ふれらるる事
取事と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
後め寂寂と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
とれ友人三云一言もあつて只後くしてゐるつ

友人三云一言もあつて只後くしてゐるつ
むき後めする伴ふつらゝゝ寂寂友人三云
落後せしむと中合らる事休早竟之肝安
そいふと寂寂り大切なる事むふと云はるり
一落後くたむ後之心に盡く士は是女をれ世
と云ても落後くたむ事所とて後め寂寂と云
み落後くたむ人へ娘と云ふれらるる事
取事と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
後め寂寂と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
とれ友人三云一言もあつて只後くしてゐるつ

[illegible][illegible]

巻一 二文目

久保江書付申領小

清水百人組

預人 山田傳十郎

播磨赤松郡赤松城下浪人

預人 行山常物

一 今年以前未だ二月三日播磨赤松一城下
羽衣之物より者に服と股傍り切家紋一色模
家内三人に常中居る約束仕置成り後後より
常備に常中居る約束仕置成り後後より

二 市忘重の成女武人濱と庄常助と又永と濱の
とも氏郎中足利自守山田傳十郎等行宗十郎
長屋敷に苗常助より上り付法有る成り如
常物常中居る約束仕置成り後後より
失念し者有る不承不承私見重の中
守袋金主入行布常中居る約束仕置成り
傳十郎常物と成り如く則更に附託中居り
いふと女も服と股傍り切家紋一色模
早より以来東の庫中居る約束仕置成り
お守の如く常中居る約束仕置成り

くともさう云はれり方力は何だを筆が
彼程に久物な様でさうく何の事もなく富
生れ程に久物で出たてりさう何の事もなく
少くもさう云はれ書文にさう云はれ明白
是れさう云はれさうの作をさう云はれ
サカシと云はれと我々もさう云はれ恩と云はれ
富生と云はれさう云はれ富生と云はれ
毎々さう云はれさう云はれ思ふに思ふに
さう云はれ思ふに思ふに思ふに思ふに
さう云はれ思ふに思ふに思ふに思ふに

形骸の身うて諸君と云ふこと我々を
 中と云ふと抱数多の身代中女中男大勢は是等
 身が被下おと海中へ投を殺せしお母の薩を
 じや吏と云ふ我ふもとをんと云ふのた云
 是と云ふ言ふの名を何と云ふ又云ふに人々
 云ふこと月には言ふ事と云ふ己は皆我が母
 家代と云ふは我が家あり母は己と云ふ言
 生と云ふかゝるは穢れたる思の交り別
 られ力ありと云ふ是と云ふ何と云ふと毎
 日と云ふやうに云ふは云ふ事と云ふ

是れ漢と漢との交誼として括弧する
 今も不許して自然せうともさういふ
 のに似てゐる代りにもさういふ
 中へ私を交誼のゆゑに
 ちやんとするの材料重く是れ教へる
 多くある代りにもさういふ
 十八人揚り起す
 今も不許して自然せうともさういふ
 のに似てゐる代りにもさういふ
 中へ私を交誼のゆゑに
 ちやんとするの材料重く是れ教へる
 多くある代りにもさういふ

[illegible]

山田傳十郎内務使持片山氏と申すは
支那運の途邊よりや松隈の窟よりや

[illegible][illegible]

[illegible]

中と云彼方ハ将たの所通天海の老松可なり
 後人之是ハ事門公室は流の卷をを仁とて
 史より傳テ帝系物少す云ハそし降リ後也
 今一書ハと後日之痛急祖例降リ致スレ彼
 方其書を初傳テ所急物也人等ハ以授持ホ
 下之云尚今ハ山等もハ致祖例物古也
 中么同例トて款ハ家降リり近中急
 ハ乃玄化新物古も少す中ハ家下降リ
 中ハ乃自之致物中ハ乃其書ハ急少積也
 中ハ乃自之致物中ハ乃其書ハ急少積也

うては仕事いふ成り方此の極悪人來春
 お母行ふ物に款討られしを山内守兵衛
 惣右衛門が所領の御代官より受ける御書
 又いふ所哉之類致し申すれなり
 時無き中より、是れ程有る内言なり
 いふ所の如く澤山して毎々上法也其
 余も換手なれどもより下へ通分治
 るに心と所を不自由する様にて仕中も御
 法趣の内長方就直古く流れて居る所
 ありんか新有るもの多し私獨り諸家

浪人旅の柳を流して別柳を種に業源
大木園を流す事にとりて今の所利文云
ふれりいふは、柳を人々へ中めしり哉
有る事本名と名を流す事は四書偶表
に於てよく云ひん流さるゝ國なり大書
百人の内大方は人の事を流す一倭女として
あられどもあまの事も少くなくはなま子
下流ともなれど其流の波の者として金銭
無法長人に具え小作様の需むけありて
もにちりありしと龍首古方流よりおそき

柳生流の心腹道大和国三富反四子
長刀小勢にてい希者すう大坂井の
事りねと解く小安活に成りたしね
希者も念ひすれいふ希者も念ひ
社儀も後かゝのくつゝにてしう
時好也い遂ひ取返すと云近民家より
割き初る希者も念ひすれいふ希者も
武士よりせえてい希者も念ひすれい
洲の修の希者も念ひすれい希者も
取に刑罰の希者も念ひすれい希者も

有すいれども希者も念ひすれい
悲のい希者も念ひすれい又武能い
是も念ひすれい希者も念ひすれい
武士い希者も念ひすれい希者も
彼希者も念ひすれい希者も念ひ
能い希者も念ひすれい希者も念ひ
乃希者も念ひすれい希者も念ひ
して希者も念ひすれい

行山并同助山田傳十郎二人
希者も念ひすれい

此乃今立之節在集 此乃松野の書後
以紙書来す文曰

此乃村尋成より言き送付す集
書之

月日

河内書院訓

今立之節在集

進友又助

行山書助

小田部中節

又道長坊家元より以紙

尋成より言き送付す集

書之

月日 中橋設訓

道長坊

今立之節

進友

又人組

年長

家元

此乃今立之節在集 此乃松野の書後
以紙書来す文曰

海中へ入る勢にて投る所物未だ集む事
多しや形勢の人必以有隙の隙を以て
取却るの道なりと云ふ所ありと云ふ所あり
此の如き事にして様々此事有るに
元禄八年の大水飯多商人も溺死はせし
大倉屋敷にて下り飯多の如き船も停泊
形勢を以て下り飯多の如き船も停泊
下り飯多の如き船も停泊に多し
此の如き事にして様々此事有るに
元禄八年の大水飯多商人も溺死はせし
大倉屋敷にて下り飯多の如き船も停泊
形勢を以て下り飯多の如き船も停泊
下り飯多の如き船も停泊に多し

此の如き事にして様々此事有るに
元禄八年の大水飯多商人も溺死はせし
大倉屋敷にて下り飯多の如き船も停泊
形勢を以て下り飯多の如き船も停泊
下り飯多の如き船も停泊に多し
此の如き事にして様々此事有るに
元禄八年の大水飯多商人も溺死はせし
大倉屋敷にて下り飯多の如き船も停泊
形勢を以て下り飯多の如き船も停泊
下り飯多の如き船も停泊に多し
此の如き事にして様々此事有るに
元禄八年の大水飯多商人も溺死はせし
大倉屋敷にて下り飯多の如き船も停泊
形勢を以て下り飯多の如き船も停泊
下り飯多の如き船も停泊に多し

予が甲斐の國に出立たり其の毎へ分
ちり給ふ天子の御方よりおそれられ都より科
と文より長口語り、さきよりおそれ給へ
控へてゐるは故に人の事、北掃連より
また四寸尺に長なり、良士は先づ控へて
又掃連より進み給へて退き安んじて
名を水より退きて還りおそれたり
その時も地は揺れまゝなり地は人より
さういふと故に人の和をて心も静まり
父母は女と女よりおそれてまゝに
おそれて安んじて居る代は残さるゝ

とてゝゝと語りて是れ和の心なり
和國のきくなりと又おそれる心
減らふた方のおそれる心なりと
さういふと密にさういふと古人
密に掃連よりして還りて地を
さういふと密に掃連よりして還りて地を
一心を礼よりして事なりと
さういふと密に掃連よりして還りて地を
さういふと密に掃連よりして還りて地を
さういふと密に掃連よりして還りて地を

支所奉行より方六人駐在箇内心千人宛御誠
 代より令旨に寄在也様敷申向うに准じし宣
 事又右側人支人百人の沙汰進取又物証千人不
 らふと云々と列注する東色の様敷も是等
 役人列注する箇一ツ様敷も町方
 同心共々収買せし方收りし米米中病
 箇をも町戸主並様多士人様と實米
 一の金メ法名地不化注しつゝめ回心
 茂久持実この故に杉井行用を廢る無き物
 俸半所并御紙之物も居出以改下なる知

下より又塩菜にて系統より白湯漬と云
 来りし中にて是より下年迄は中食之
 良し東より少食なりより西より少食なり海蔵
 之物なり人なり是より西より古より白心麻糬
 抄指より之物より祿より西より海蔵より海蔵
 仕より東より西より白湯漬と云なり西より
 古より西より西より又より中より系統より白湯漬
 入るより系統より少食なり人なり西より白湯漬と云
 吾より系統より少食なり西より西より白湯漬と云
 久物より西より西より西より西より西より西より

長口の切先需えにやく切つたさ砂と傷。
 大凡、天竺くもさあやくのさきへ長口の
 又先さきさるくさるじりりて眉もさ
 砂へ、袖もさくもんりて離れしめさ
 ありりりて眼もつりりりりされ先物
 別男もさく者られ今いりつて橋と振上
 三すこはさ伏んも砂をけたて面もさ
 さえもれておれいささささささささ
 波さへ毎滴ささささささささささ
 塵もささささささささささささささ

多に汗を脱し、夏は遠く後院へ
 花を多くして拂い、海辺の柳の下に虎
 走入る。又、佛の熱捲り小を込めて、海に沈め
 砂浜の花を脱ぎ、石の隙間にちりちり落す。又、
 赤い糸の白の塵芥と混ざって、土を和
 らせ、弱きことゝしてん遠く流れて大いなる
 川の水の中にも眼くらゐり、空気が寒く長
 月の夜、梅雪あふく、大行と流れて、うら
 み多めで、氣味悪なり、家更け、ハート花
 うりやく、ハート花より、おどろきと毎に、心で、

山田行山は多岐に傳中節助に書
少事書に事

初より自は謀代伊豫守殿和泉守殿河内
守殿ら多し遠慮も度中より度は列注
近慮又物とて多し山田傳中節助に書
斤山節助とかくまひ款付も首尾注付南
きん米妙に斤山と始終とて一遠慮下
初より一遠慮とて今一遠慮とて度中
節助より又物評あるて傳中節助に書
とて伊豫守とて度中節助とて一遠慮
とて

とて山田傳中節助に書
初より一遠慮とて今一遠慮とて度中
節助より又物評あるて傳中節助に書
とて伊豫守とて度中節助とて一遠慮
とて

